

2019年8月18日

「はじめてのキリスト教」説教要約

まことの神を知る

(エレミヤ29・1〜9)

一、エレミヤの時代

エレミヤが生きた時代は、主イエスがお生まれになる六百年ほど前です。

その時代、旧約聖書の舞台となった中東（ペルシアとその周辺）、そして近東（イスラエルの周辺）では、大国が興っては小さい国々を呑み込んでしまう時代でした。昔からあった中近東の大国として、古代エジプト、アッシリア帝国、バビロニア帝国等が挙げられます。イスラエルは小国でしたから、いつ大国に呑み込まれるか分からない不安がありました。こうして、北王国イスラエルは前722年にアッシリア帝国に滅ぼされました。その後、バビロニア帝国が強烈な力を持つようになり、アッシリア帝国を滅ぼしてしまいました。南王国ユダは、主に頼りつつも、実際的にはバビロニア帝国に頼るか、エジプトに頼るかという選択肢を迫られるようになりました。

エレミヤが、主の言葉を取り次ぐ預言者として活動を始めたのは前627年のことです。8歳で南王国の王になったヨシヤの第13年のことです。ヨシヤ王と言えば、神殿の宝物庫から「律法の書」が発見され——それは、申命記の一部と考えられています——、悔い改め

て宗教改革に乗りだした王です。律法の書が発見されたのはヨシヤ王の第18年のことです。ヨシヤ王による宗教改革の前のことになりました。以来、四十年の長きにわたって、主の言葉を取り次ぐ預言活動をしました。

きょう開いた箇所は、エレミヤが預言活動を始めてから約三十年後のことです。主の言葉をとり次ぐ預言者として成熟した時期になっていたと思われまふ。

二、エレミヤのメッセージ

預言者エレミヤは、南王国ユダを取り巻く社会情勢を見つつ、ある結論に至りました。それは、今はバビロンの支配下に下るのが主の御心である、エルサレムに留まるのは神への反逆である。しかし南王国の歴代の王たちはエジプトと手を組んで、バビロンの手から逃れる道を選びました。ですから、王にとつて、エレミヤは反逆者です。そういうレッテルを貼られつつも、エレミヤはバビロンの下で平和に暮らすように呼びかけました。それが、主の御心であり、ご計画であると主の御意思を受け取ったからです。そのエレミヤが、主からいただいたメッセージが29章4節より9節に書かれている言葉です。エレミヤは、すでに異国の地に捕虜として連れて行かれた元エルサレムの住民

に対して、この手紙を書きました。1節をご覧ください。へエレミヤ29・1↓では、エレミヤはだれにこの手紙を託したのでしょうか。時の王ゼデキヤが遣わした二人の使者です。3節に書かれています。この手紙は当然のこと、検閲されてネブカデネザル王に報告されたものと思われまふ。そういう事情を知つて、4節から7節をご覧ください。〈略〉「エルサレムからバビロンへわたしが引いて行かせたすべての捕囚の民に。家を建てて住みつき、畑を作つて、その実を食べよ。〈略〉わたしがあなたを引いて行つたその町の繁栄を求め、そのために主に祈れ。その繁栄は、あなたがたの繁栄になるのだから。〉」いかがでしょうか。読んだだけで、意味が分かるのではないのでしょうか。

三、預言者に見る不思議

それにしましても、私には不思議に思えることがあります。それは、バビロンの軍門に降ることが主の御意思であると、エレミヤがどうやって知つたのかという疑問です。「それは、神の霊に動かされたからです。聖書に書いてありますから」と言えば、それまでですが、エレミヤを動かした「霊」が「神からの霊」であつたと、エレミヤが活動した時期にあつて、どうやって知るのでしょうか。これは非常にむずかしい課題であると思われまふ。エレ

ミヤは新興勢力である、ネブカデネザル王が率いるバビロニア帝国に、異国をも動かす神の御手を見たようです（↓エレ25・8〜9）。

それにしましても、エレミヤをして、そのように思わせた霊が神からの霊であつたと、その時代にあつてどうやって知るのでしょうか。今となつては聖書の記述によつて分かるのですが、その時点においては、やはり分からないと思ひまふ。どうしてこんなことになつたのかと申しますと、今現在自分たちを導いている霊が、神からの霊、すなわち聖霊なる神であると信じて、多くの信仰者が歩んでいるからです。聖霊の導きと信じていたのに、聖霊なる神の導きでなかつたら、たいへんなことになると思ひまふ。

私は信じまふ。「何が神の導きか」と思ひ迷うほうが大丈夫だと。「神の導きはこうです。今聖霊様が私に語りました」と、はつきり語つてしまふ指導者のほうが危ないと思ひまふ。と言ひまふのは、神への信仰というものは、人間の思想では表せないものだからです。信仰が、すぐに答えの出るようなものがあるなら、それこそは危ないかも知れまふ。私たちは迷ひつつ、あつちにおつかり、こつちにおつかり、ある時は引き返し、ある時は自分の過ちを認めて謝罪して、歩みます。これが、ほんとうの信仰に近いのではないのでしょうか。